

オール.フィジカル

まろかに

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『モノ』を発動した事により、全ては始まった。『悲劇』『驚愕』『憤怒』『歓喜』『興奮』。【ホップ】【スピード】【キック】。〈バード〉〈モール〉。そして

『ある少女』も。

目次

1話	スタート・ラン	1
2話	全滅フェスティバル	11

1話 スタート ラン

カチャ・

『モノ』が『ソレ』を持っている

カチイ!

『モノ』が『ソレ』を発動した

『ソコ』から『ストーリー』は始まった

簡単で単純なことで『ソレ』は始まった

簡単で単純なことで『ソレ』は始まってしまった

――

――

――

ザツ： ザツ：

『あくあ： まくたかあ：』

イメリルア（18歳、『元』速読者）『やっぱり『速読』1本で生きていくのは、きつすぎるかなあ。』ザツ： ザツ：

独り言を呟きながら。白色と青色の服を揺らしながら。18歳、『元』速読者の『イメリルア』は嘆いていた。そう、『クビ』になったのだ。

イメリルア『んく： マネーどうしよ：』チャリン： チャリン：

――

――

――

ガチャ・ ガチャリ!

イメリルア『たーだいまあ』ギイイ：

少し古そうな家の少し古そうなドアを『イメリルア』は開けた

『おかえりー』

アペレンス（16歳、『イメリルア』の『妹』、『ご飯、出来てるよ』机の上の皿からは湯気がたっていた。そして、その机の椅子には『アペレンス』、『イメリルア』の『妹』が座っていた。

イメリルア『おうまそー：』タツ： タツ：

アペレンス『：お姉ちゃん：なんか、声が暗い』

イメリルア『あく、分かっちゃった：？実はさあ、『クビ』にされてさあ』ポイツ

カバンを投げながら『イメリルア』は嘆いた。

アペレンス『うそーん：』

イメリルア『あんの、クソ上司い：絶対に許さねえく：』ドサツ!!
アペレンス『えっ、退職金は？』

イメリルア『今回は出なくてさあ：いただきます：』パン：

アペレンス『うそーん：』

イメリルア『ちよつと：後で、ハロワ（ハローワーク）行ってくる：』モグモグ：モグモグ：

アペレンス『あ、じゃあさあ：ついでに醤油買ってきて』

イメリルア『りよーかーい』モグモグ：モグモグ：

――

――

――

イメリルア『いつてきまーす：』ガチャ：

アペレンス『いつてらっしやーい』

バタン：

イメリルア『あくあ：普通に仕事就こうかなあ：』ザツ：ザツ：

『イメリルア』が、しつこいくらい嘆いている時だった。

バサア！

羽の音がした。

普段の生活でも羽の音が聞こえる時はあるだろう。が、『イメリルア』の聞こえた羽の音は、普段の生活では聞けないぐらい『大きかった』のだ。

イメリルア『：え？』バツ：

勿論『イメリルア』は疑問に思い、上を向いた。『すると』

『カアア！カアア！』

イメリルア『：ふあ!?』ブワアア：！！！！

『『巨大カラス』』

『77777ウ．．オ3333311．．』

どこかからか、『変な言葉』が聞こえてきた。

アルリア『ツ．．！』クルツ!!

イメリルア『え．．？』チラ．．

言ったのは『さっきのヤツ』だった。

『0433．．タチ．．ハ．．オソイ．．』バキバキ．．!!バキバキ．．!!

明らか『サイズ』は違うのだが、『死んだ場所』がそこなので、『ソイツ』以外にいないとしか考えられないのである。

アルリア『早く逃げろ！奴がどんな、力を持っているか分からない内に！』ガチャ!!

イメリルア『え．．？え．．？』

『ステニ．．コウゲキ．．』

アルリア『ほら、もう既に攻撃してるって言うてるんだからさあ！』ガチャ!!

『シヨウトシタケド．．キャント．．ダツタ．．』

イメリルア『．．は？』キョトン．．

アルリア『へ．．？』

イメリルア『．．もしかして．．騙し？』

『タブン．．ソレ．．』

アルリア『．．だ、騙すなあ！』

イメリルア『．．もしかして、騙されやすい人？』

アルリア『んっな、訳ねえだろ！高校生まで『サンタさんって、本当にいる』って事を信じてたなんて口が朽ち果てても言わねえからな！』

イメリルア『．．言っちゃってるし、地味にギャクだし』

アルリア『あ、ヤベ．．』

『トリアエズ．．サツス．．』

『巨大カラス』だった『モノ』は、背中から翼を生やした。

バサアアアア!

アルリア『じゃなくて！』ガシツ!!

イメリルア『ちよお!』グンツ!!

『アルリア』は『イメリルア』を掴み、全速力で走った。

『ニガスワケ：デハナイ。』バサア

『モノ』は、追いかけた。!!!!

ー

ー

ー

『ハア：！ハア：！』

イメリルア『腕痛っ：足痛っ：』ゼー：ゼー：

アルリア『もう少し、鍛えとけ：いくら、一般人でも：』

イメリルア『結構：ハア：！横暴すぎません：？』ゼー：

ゼー：

アルリア『：』

イメリルア『というか：ふうう：さっきの、ヤツなんなんですか：？全然危険に見えませんがど：』

アルリア『それが悪質なんだよ：『全然危険そうに見えない』：それが悪質なんだ』

イメリルア『え：？』

アルリア『アイツらは『人間の警戒心』を解こうとしてくる。着ぐるみの様に可愛く見せてな』

アルリア『そのせいで『警戒心』がなくなり、人間は『殺される』：っていう訳だ』

イメリルア『：『巨大』の時でもって事ですか？』

アルリア『ああ：俺が撃たなかったら、お前は上手く丸められて殺されていただろうな』

イメリルア『：というか『巨大』なヤツと、さっきのヤツって同一なんですか？』

アルリア『：奴等の名前は『セパレイタ』。何故かは分からないが『進化』出来るんだ』

イメリルア『は、はあ：つまり出来ると：』

『ミツケタア』

優しそうな声が聞こえた。

イメリルア&アルリア『：！』クルツ!!

バード・セパレイタ『ナアンデ、ニゲタノサア』

アルリア『逃げたんじやない』スツ：

ビビ：カチャツツ！

アルリア『態勢を立て直ただけだ』カチャツツ：

『アルリア』は、なにもない空間から『機械』の様な『モノ』を取り出した。そう、唐突に。

そして、ソレを腰に触れた瞬間

ビビ：カシユウウ。カチャンツツ！

自動で巻かれた。

バード・セパレイタ『ナンだ。ソレ』

イメリルア『機械：？』

アルリア『詳しい事は後で説明してやるよ。それまで、色々な事は『自己責任』で任せたぞ』スツ：

ビビ：パシユンツツ！

カチャツツ！

そうして『アルリア』は、なにもない空間から『釘の様な真っ直ぐな棒』を取り出した。そう、唐突に。そう、『再び』

そうして。その天面を『押し込んだ』

ググ：カチイ！

【ホップ】

アルリア『装強』ギユインギユインギユイン：ギユインギユイン

ギユイン：

そうして。それを『機械』に『はめ込んだ』

カチャンツツ！

【Begin】

【ハイ ホップ】

ボシユンツツ！ボシユンツツ！ボシユンツツ！ボシユンツツ！ボシユンツツ！
！ググググツツ！

ブワアアアア：

アルリア（チューンホップ）『さあ。生きるか死ぬかの『賭け（バ

トル)』の始まりだ』ブワア・

イメルルア『足になんか:』

バード・セパレイタ『ハマッタ:』

『アルリア』の足には『鎧』の様な『モノ』が、はまっていた。

アルリア(チューンホップ)『とりあえず・よつつ・!』グググ
グツツツツツ!!!!!!!!!!!!

『アルリア』が踏ん張った所を中心に、地面が液化化みたく地割れみたく崩れ始めていた。

アルリア(チューンホップ)『と!』バツ!!

と、『アルリア』が地面から離れた瞬間。

ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ

常人の人間では不可能なくらい、飛んだのだ。『セパレイタ』という『モノ』の翼よりも高く。!!!

イメルルア『うつつそーん』

バード・セパレイタ『シカタナイ、カンゼンニ『サツ』スイキオイ
デイクカ:』バサツ!!バサツ!!

どうやら『可愛く見せる』のはやめにして、本気でいくらしい。

バサアアアア!

イメルルア『うつつそそーん』

――

――

グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
バツツサアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!!

今日の天気は快晴。雲1つない、と言いたいが: 実際はちらほら
!!!!!!!

ある。

アルリア(チューンホップ)『つと・ここが最高到達か』グ
ンツ!!

『アルリア』の体が一瞬止まり、徐々に落ちていく。

アルリア(チューンホップ)『さて・ぱぱっと、片付けるか』カ

と。

イメルルア『ん？』

グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ドグオオ
オオ

イメルルア『わー』ブワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
イメルルア(すげえく、cgかなあ。やべく。はえく。つく)!!!

い。すげく、ものすげく』

『イメルルア』が現実逃避していると、上空から『アルリア』が降りてきた。

アルリア(チューンホップ)『よつ。』ボシユン。!!ボシユン。ボ

シユン。スタツ。

無事に着地した『アルリア』は、『機械』から『棒』を取り出した。

カチャーン。

アルリア『おい、無事か?』フツ。

イメルルア『え、あ、ああ。はい。(すげえく。抜いたら消えた。)]』

アルリア『とりあえず。そうだな。お前の家は、ここから近いかな?』

イメルルア『えつ、あつ。はい。』

アルリア『なら、今すぐ帰れ。近くに『セパレイタ』が残っているかもしれないからな』

イメルルア『あ、わ。分かりました。』クルツ。ダッ!!ダッ!!

アルリア『ん』ピピ。

『アルリア』の電話が鳴った。

アルリア『はい、もしもし?』

「倒した?」

アルリア『ああ、ついさつきな』

『シクサ』が壊れるのは確認した?」

アルリア『いや、空中から地面に叩き落としたんで。確認はしてないが』

「確認しろお！」

アルリア『はいはい、うるさいうるさい』

「この前も確認しなかったら、倒しきれてなかったじゃんか！」

アルリア『う…』

「はーやーくー！」

アルリア『はいはい…』ガサゴソ：ガサゴソ：

『アルリア』は渋々探し始めた。

ー

ー

ー

『イメリルア』は思った。

イメリルア『(最近のヒーローショーって設定もこってるなあ…)』

ザツ：ザツ：

と。

イメリルア『(まあ、恐らく…今、あっちでは打ち上げでもやってるんだろうなあ)』ザツ：ザツ：

『イメリルア』が歩いている風景に変わりはなかった。いつも歩いている風景だ。

イメリルア『(帰って、夕御飯たーべよ)』ザツ：ザツ：

しかし、1つだけ違う風景があった。

イメリルア『…え…?』

そう：1番自分が見た事ある景色だけ違うのである。

イメリルア『え…?c.g.じゃ…ない…?』

そう：『自分の家』が×いたのだ。

×

2話 全滅フェスティバル

ガチャヤ・ゴソ・

アルリア『しつかりと確認したが…ないぞ』

「土とかに混じってない?」

アルリア『こちら一帯は調べたが…なかった』

「あつそく…ちゃんと、2つあつた?」

アルリア『ああ…ちゃんと、2…ん?』

「ん?どうかした?あつた?ねえ、あつた?」

アルリア『おい、ちよつと待て…『2つ』だと…?』

『アルリア』は聞き間違いかと思い、焦って聞き直した。

「そう、2つ。だつて2体出てるつて言つたじゃん」

アルリア『…ヤバイ!』クルツ!!ダツ!!ダツ!!

「えっ!?あーあと『アレ』送つ…」

ブツンツ!

アルリア『くそつ!』ダツ!!ダツ!!

――

――

――

イメリルア『…なに…これ…』グチャヤ・グチャヤ・

地面…と言えないほど、原型が残っていないほど『溶けていた』

イメリルア『…アペ…?いる…?』グチャヤ・グチャヤ・

…と、いうよりかは『溶かされていた』。『歩くべき場所』も。『帰るべき場所』も。そして

グチャリ…!

イメリルア『…え…?』クル…

『守るべき』||『人』||『愛した』も

イメリルア『…あ…ああ…あ…』

…オ…ヤン…

イメリルア『ああ…あ…あ…』

ドロオ…

――

――

アルリア『ツ…！』ダツ!!ダツ!!

『もう、手遅れだぞ?』

アルリア『…！』クルツ!!

『既に…何人かは殺した』

アルリア『…お前…『モグラ』か…?』

『ソレ』は、静かに訂正した。

モール・セパレイタ『正しくは『モール』…だけどねえ』

アルリア『成る程…知性を優先して『進化』させたか』

モール・セパレイタ『正解』ドロドロ…

アルリア『…地面が溶けている…?』

モール・セパレイタ『『知性』があるからこそ言うが…こっちは『目』が見えない。故に…君がどんなファクションかも…どんな顔なのかも分からない』ドロドロ…!!

『ソレ』は、余裕な口調で喋った。

アルリア『…だから?』

モール・セパレイタ『故に『罪悪感』という『モノ』がない…『思う』という行為をしないで良い。故に『無差別』に殺せる…故に『本気』っていう事だ』ドロドロ!!ドロドロ!!

アルリア『『目』が見えなくとも…『聴覚』で悲鳴は聞こえる筈だぞ?』スツ…

ビビ…カチャ…

『アルリア』は、再び『空間』から『機械』を取り出した。

アルリア『そういう事には『罪悪感』はないのか?』カチャツ…カシユウウ…カチャンツ!!

モール・セパレイタ『故に、だ…一番に『喉』を潰す。悲鳴もあげられない程に』

アルリア『ふう…贅沢なぼつちやんだな』カチャツ…カチイ!!
【ホップ】

アルリア『装強』ギューンギューンギューン・
カチャンツ!

【Begin】

【ハイ ホップ】

ボシユンツ!ボシユンツ!ボシユンツ!ボシユンツ!ボシユンツ!
!ググググツ!

アルリア(チューンホップ)『やっぱ、欲張りなやつつてのは・・
どこにもいるんだな』

モール・セパレイタ『あ、友達!』スツ!!

アルリア(チューンホップ)『もう1体!』クルツ!!

そこには、なにもなかった。

アルリア(チューンホップ)『騙しやがったな!』クルツ!!

アルリア(チューンホップ)『い、いない: !?』ガチャ!!

ドロオ!

『アルリア』の後ろの地面が『溶けた』

瞬間。

アルリア(チューンホップ)『そこかッ!』クルツ!!ガチャ!!

ダアンツ!ダアンツ!ダアンツ!

『アルリア』が後ろに向けて『弾丸』を発射した

瞬間。

『地面を踏みしめる音は・・よく、聞こえていた』

ヒュツ

ザシユンツ!

アルリア(チューンホップ)『ツ!』ブシユツ!!!

ドサドサツ!

アルリア(チューンホップ)『くそ: !』ドロドロ・

『セパレイタ』は、『土』から出てきた。

モール・セパレイタ『言つたら、『目』が見えないって・・故に友達
がいる事なんて分からないのさ・・君、騙されやすい性格だろ?』

アルリア（チューンホップ）『さあな…自分の性格つてのは自分では分からないモノ…だぞ…？』『ドロドロ…!!』

モール・セパレイタ『丁度良い…未練があるまま…殺せる』
スツ…

『セパレイタ』が攻撃をしようとした瞬間。

『アルリア』が足掻きをしようとした瞬間。

ザツ…

モール・セパレイタ『…!』ピクツ…

アルリア『…?』

モール・セパレイタ『…まだ、生き残りがいたのか』

アルリア『…!アイツは…!』

ザツ…ザツ…

アルリア『さっきの…!』

歩いてきたのは

イメリルア『…』ザツ…ザツ…

『イメリルア』だった。

モール・セパレイタ『…歩幅の感じからすると…喉を潰すほどでもなさそうだな』ニヤツ…

アルリア『ツ…おい!逃げろツ!家に籠ってる!』

モール・セパレイタ『無駄だ、無駄だ…気づかれたとしても…なにも出来まい』ドロドロ…!!

『セパレイタ』は、再び『地面に潜った』。

アルリア『ツ…!』ググ…!!

既に【ホップ】は解除されていた。

イメリルア『…』ザツ…ザツ…

『イメリルア』は、うつむいたままだった。

アルリア『：！』

『アルリア』は『異変』に気がついた。『イメリルア』の『手』になにかがあるのだ。

アルリア『アレは：俺達の：？』

イメリルア『：』ピタ：

ドサ：ガチャ：

『イメリルア』は『突然』：手に持っているモノを開けた。
どうやら『アタツシケース』のようだ。

イメリルア『：』ペラ：

『イメリルア』は『咄嗟』に、『説明書』を読み出した

イメリルア『：』ペラペラペラペラペラペラペラペラ：

パタン：

そう、とてつもない『スピード』で。

アルリア『なに、やってんだ：！おい！逃げろ！それを置いて！』

イメリルア『：』カチャツ：

そして：『アルリア』が使っている『機械』と同じ『機械』を取り出した。

イメリルア『：』ス：

カシユウウウ：カチャンツ！

アルリア『な：！？』

そして：『アルリア』が使っている『棒』と似たような『棒』を取り出した。

イメリルア『：』カチャツ：

そして『押し込んだ』。

カチイ！

【スピード】

イメリルア『：』ギユインギユインギユインギユイン：ギユイン

ギユインギユインギユイン：

ガサア！

『突然』ヤツが出てきた

モール・セパレイタ『そこだ』チャキ!!

『瞬間』

スカッ

アルリア『：は：!?!』ブワッ：!!

モール・セパレイタ『当たらなかった：。だと：?』ブワアア：!!
ブワアアア：！

『イメリルア』は、『アルリア』の後ろに移動していたのだ。

アルリア『：嘘だろ：!?!』ブワアアアア：!!!!

モール・セパレイタ『：!』クルッ!!

【Begin】

ブワアアアアアアアオオオオオオオオオオツツ
!!!!!!

【クイック スピード】

イメリルア（チューンスピード）『：』ザザア：!!

アルリア『一瞬であそこに：。というか、使えているのか：?』

イメリルア（チューンスピード）『：』セパレイタ』とか、言ったな』

ゴソ：:

『イメリルア』は、いつの間にか拾っていた『アタツシケース』から、『武器』を取り出した。

イメリルア（チューンスピード）『お前には『なにも』感じさせない：

『瞬間的』に『殺す』：』チャキ：!!

モール・セパレイタ『殺す、ねえ：。随分と物騒な言葉を使うじやないか：。君はb。』

ヒュッ

イメリルア（チューンスピード）『話が長い』

『いつの間にか』、『イメリルア』は『セパレイタ』の真後ろにいた。

モール・セパレイタ『ツ!?!』クルッ!!

ドパドパドパツ！ドパドパドパツ！

モール・セパレイタ『ガ・!?』ビチャビチャツビチャアツ!!ガクツ

!!

アルリア『：：なあ．．にがあ．．おこってるんだ．．？』

イメリルア（チューンスピード）『：：なあ、聞かせてよ．．』

そして静かに訊いた。

『私の『妹』を殺した時．．どんな気持ちだった？』

アルリア『：：！』

モール・セパレイタ『『妹』：？『妹』：つ．．さあ．．覚えてないな．．』

ヒュツ

ドパドパドパツ！ビチビチャアツ!!

モール・セパレイタ『グファア．．!?』ビチャビチャツビチャアツ!!

イメリルア（チューンスピード）『まあ、無理もないか．．お前は『目』が見えないらしいからな。無理もない無理もない』チャキ．．

ヒュツ

ドヒュツ！グシャグシリツ！ビチャツ！グシャリツ！

モール・セパレイタ『ガバアア．．があ．．！』

イメリルア（チューンスピード）『だからさ．．怒ってないよ』チャキ．．

モール・セパレイタ『ハア．．！ハア．．！』ドロドロ．．!!

イメリルア（チューンスピード）『故に』．．どんな気持ちだった？』

アルリア『：：！』

モール・セパレイタ『ハア．．！ハア．．！ハア．．！』ボタボタツ!!!!
ボタボタツ!!!!

イメリルア(チューンススピード)『なあ…『楽しかった』か?『悔しかった』か?『虚しかった』か?『寂しかった』か?『悲しかった』か?答えてくれよ』

モール・セパレイタ『ハア…!ハア…!ハア…!ハア…!ハア…!ハア…!』
『ボタボタツ!!!!!』
『イメリルア』は、言った。

『答えてくれたら、迷わず殺せるからさ』

モール・セパレイタ『や…止める…!分かった…!答える…!答えるから…!…じゃなくて…えっ…あっ…なんだ…?え…?』

イメリルア(チューンススピード)『さっきの『鳥もどき』よりかは『知能』があるが…結局は中途半端だな』

モール・セパレイタ『っ…テメエ…!『ステータス』を『能力』に振り撒くる奴とは違うんだよ…!』ドドロロツ!!ドドロロツ!!

イメリルア(チューンススピード)『ふうん、凄いな。で…『違う』って事はさあ』

『イメリルア』は、言った。

『死に方も『違う』様にしないと、駄目なんじゃないの?』

モール・セパレイタ『ツ!?』ビクツ!!

イメリルア(チューンススピード)『残念、時間切れ』カチャツ…
『イメリルア』は『機械』を回し、押し込んだ。

カチャンツ!カチャンツ!

【First Second】
そうして…それを更に押し込んだ。

カチイ!

【Attack】

『瞬間』『セパレイタ』は『初めて』恐怖を覚えた。見えないのに強大

な恐怖を。

そして『初めて』声が出なかった。

言いたかったのに。言えなかった。

モール・セパレイタ『：！』

ヒユツ ヒユツ ヒユツ ヒユツ ヒユツ